

養護教諭のアイデンティティ変容過程と人生における意味

岸本 久美子 片桐 亜希 辻河 昌登
(豊岡高等学校) (兵庫教育大学)

本研究は、退職養護教諭へのライフストーリー・インタビューを通して、養護教諭が他者との関係性のなかで、自身のアイデンティティ様態をどのように変容させ、その変容が人生にどのような意味をもつようになるのかについて、ナラティブ・アプローチの枠組みを用い明らかにすることを目的とした。半構造化面接で得られた語りを分析した結果、時代の変遷とともに役割が変化してきた養護教諭は、対象者の視点から自身の役割をその都度変化させながら、アイデンティティ再構築のプロセスを経験していることがうかがわれた。また養護教諭には、相手に柔軟に寄り添う力と、全体を俯瞰しその相手の状態に合わせて役割を変えていくしなやかさ、そして逞しい調整力を併せ持つことが重要であることが明らかになった。さらに、このようにして相手の成長を支援するかかわり（養護性）を実践していくなかで、養護教諭のアイデンティティが成熟していくことが示唆された。

キーワード：養護教諭、アイデンティティ、ライフストーリー、養護性

岸本久美子：兵庫県立豊岡高等学校 〒668-0042 兵庫県豊岡市京町12番91号

片桐 亜希：兵庫教育大学大学院・連合学校教育学研究科 博士課程〒673-1494 兵庫県加東市下久米942-1

辻河 昌登：兵庫教育大学大学院・人間発達教育専攻 准教授 〒673-1494 兵庫県加東市下久米942-1

“Yogo” Teachers : The Process of Changing Identities and How Life is Affected

Kumiko Kishimoto
(Toyooka High School)

Aki Katagiri and Masato Tsujikawa
(Hyogo University of Teacher Education)

The purpose of this study is to clarify how the identities of retired “yogo” teachers have been affected due to many years of experience and emotion. In addition, how have these changes -if any- affected their lives and relationships with others. The studied life stories were acquired by half-structure interview then analyzed through the framework of a narrative approach.

The result obtained was as follows :

- (1) “Yogo” teachers have adapted their roles to conform with the changing times and environment. In doing so, an element of identity re-creation occurred.
- (2) It is important for “yogo” teachers to be capable of flexibility. They must be able to view ‘the whole’ objectively and adjust to individuals according to the given situation and their needs. It is hypothesized that as “yogo” teachers flit between varying roles of support, they experience a development in their personalities.

Key Words: “yogo”-teacher, identity, life-story, nurturance

Kumiko Kishimoto: Toyooka High School, 12-91, Kyomati, Toyooka-City, Hyogo 668-0042 Japan.

Aki Katagiri: The Joint Graduate School (Ph.D Program) in Science of School Education, Hyogo University of Teacher Education, 942-1, Shimokume, Kato-City, Hyogo 673-1494 Japan.

Masato Tsujikawa: Associate Professor, Hyogo University of Teacher Education, 942-1, Shimokume, Kato-City, Hyogo 673-1494 Japan.

1. 問題と目的

近年、社会環境や生活環境が目まぐるしい変化により、教育現場では、子どもの心身に関する様々な健康課題が顕在化し、多様な対応が要求されている。養護教諭の果たす役割もそうした時代のニーズと共に変化している。しかし、養護教諭の職務内容や学校内での位置づけが明確にされたかといえ、決してそうではない。たとえば、2012年2月の全国養護教諭連絡協議会において、「時代の変化に対応した養護教諭の役割を追求する」といったテーマが掲げられるように、養護教諭は職業的役割を模索し続けている状況にある。

平成21年学校保健法が一部改正され、健康相談のすすめ方や保健指導の重要性が周知された。職務内容については、相談活動やそれに伴う他教師との連携の比重が増え、養護教諭には、受動的な寄り添う姿勢のみではない能動的な姿勢が求められるようになった。ここでいう相談活動は、子どもが抱える心身の問題の発見・援助とアセスメント、カウンセリング、教師や保護者のコンサルテーションと幅広い。また養護教諭は、スクールカウンセラーと学校、ないし他の援助資源とのコーディネーションという重要な役割も果たすとされる。なかでも健康相談は、子どもの内面との人間的交流を図る意味で重要な職務である。そこでは、技法的要素よりも、それを根底で支えている養護教諭自身の生き方や、人格をも含めた人間的力量ともいべき教育力量が求められている。このように非常に難しい職務であるにもかかわらず、一般には評価されにくいのが現状である。その中で養護教諭はさまざまな思いを抱きながら対応している。

ところで岡本(2008)は、“女性の人生は、「個としての自分」と「他者とのかかわりの中での自分」のはざままで揺れることが多い”としている。また、やまだ(2000)は、“個人の生涯発達をみるには、発達をその個人の自我の確立や個人の一生に閉じるのではなく、個人を越えて拡大する他者との関係性の広がりとしての社会文脈と、次世代を育み引き継いでいく歴史的な文脈の両方を視野に入れた、ライフサイクルという大きいパースペクティブが必要”と述べている。

歴史に鑑みて職業婦人である養護教諭は、今も多くが女性である。さらに養護教諭は、生命にかかわる重要な事象も独りで判断・行動・実践し、その結果を受け、省察を繰り返してきた。そうした職業生活において、個々の養護教諭のなかに、自分をとりまく様々な環境の変化に伴い、アイデンティティのゆらぎが生じることは避けられない。このゆらぎを理解するためには、他者との関係性のなかで多様な役割が複雑に絡みあう過程を精査することが求められるであろう。

養護教諭のアイデンティティについて田澤(2005)は、“自分の役割を自在に転換させ、生徒のニーズに即した

対応を柔軟に変化させる「何でも屋」であった”と述べている。さらに田澤は、養護教諭のアイデンティティ変容の様態について、“時代の変遷するなかで実践を営み、対人援助に熟達するにつれて養護教諭のアイデンティティが変化していく”と述べている。筆者は、他者との関係性のなかで漸進的に変容していく養護教諭のアイデンティティについて、自らも当事者の一人として関心をもった。養成課程など養護教諭個々の背景に違いもあり、この「何でも屋」とも称される養護教諭のアイデンティティは、教諭それぞれの経験に応じた多様性が想定される。よってその変容過程も、個としての私的な生活も含めて全体的に描き出す必要があるだろう。

そこで本研究では、変遷する時代と共に多様な役割を担ってきた退職養護教諭にインタビューを実施した。そこで得られた語りから、一人の人間のライフサイクルに即し、いかなる苦勞をし、工夫をしてきたのかといった経験を再構成することによって、質問紙や観察では到達しえない『意味』の世界に接近できるのではないかと考えた。そしてそのなかから、養護教諭がアイデンティティを構築していくために、どのような変容過程を経験してきたかについて、心理臨床学的に捉えることを目的とした。さらにこの研究により、養護教諭をはじめスクールカウンセラーや地域の臨床心理士・保健師など少数派の対人援助職者にとって、主体的な生き方を見出すためのひとつのモデルを提示できるのではないかと考えている。

2. 方法

(1) 研究協力者：退職後、5年以内の養護教諭であるAさんを対象とした。Aさんと面接者は、同じB県の養護教諭研究会の会員であり、すでに面識があった。

(2) 調査期間：X年5月から8月であった。

(3) 手続き：書面と口頭でインフォームドコンセントと同意の後、フェイスシートに家族関係や近況を記入してもらい、録音の承諾を得て1回60～90分程度の半構造化面接によるライフストーリー・インタビューを2回実施した。面接実施時期や場所については、Aさんの希望にあわせて喫茶店やAさんの自宅で行った。

(4) 質問内容：質問項目は、竹下(2003)の退職教員へのインタビュー項目を参考にした。そして、実践に伴い養護教諭のアイデンティティが変容していく過程を、私的な生活を含め全体的に描き出すために筆者が必要と考えた項目を加え、以下の9項目を設定した。

①職業選択の動機、②理想と現実のギャップ、③特に印象に残る出来事、④人とのかかわりで印象に残っていること、⑤大切な人の存在の影響、⑥コントロールできなかったことや辛い時の支え、⑦私的な時間の過ごし方、⑧職業を通して得たものがあるとしたら何か、⑨これからの人生の過ごし方。

(5) 面接者の属性：Aさんと同じB県の養護教諭として約29年の経験を持つ者であった。

(6) 分析方法：ナラティブ・アプローチの分析の枠組みを用い、竹家(2008)に倣い、単語や文節ごとにコード化せずに、プロトコルの数行分に対しての意味や現象に対する説明概念を生成することを試みた。そして、語り手がどのような出来事を取り上げ、どのような言葉を使い、どのように表現するのかに注目しながら経験の意味について考察を深めていった。具体的には以下のように進めていった。

- ① 逐語化したデータを精読し、全体としての形を見失わないように注意し、全体の語りの流れをみた。
- ② 語られた順番、特に聞き手と語り手の共同による継起順序の流れをみた。
- ③ 語られた量と「語りの種類」に着目し、語り手の人生の「鍵になる言葉」を見出した。
- ④ 物語の筋に基づき、アイデンティティの変容に着目した。
- ⑤ 評価や態度などの語りに注目し、経験の意味づけを分析した。
- ⑥ 養護教諭のアイデンティティ変容過程を中心に、ライフストーリーを構成し解釈した。そして人生における“養護教諭であること”の意味を見出した。
- ⑦ 着任当初から時間軸に添って養護教諭のアイデンティティ変容過程を考察し、個々人に特有のあるいは共通の心理状態が見いだせるかを検討した。

3. 事例と考察

小学校・中学校・高等学校と併せて39年の教職経験を持つAさんは、現在、実母、長男夫婦、孫2人と同居している。健康状態は普通で、臨時講師やボランティア活動など積極的な対人交流の機会がある。最近のストレスには、「養護教諭を退職したこと」と記している。また、Aさんから自発的な記入はないが、インタビューのなかで、夫が退職前に逝去したことを語った。

Aさんの語りは、面接者との対話による相互交流を経て、面接者に伝えたい言葉を、模索しながら生成されたため、直線的あるいは時系列的なものではない。そのため、提示したスクリプト内の「語り」には文法上の修正を加えず、秩序化も施していないことをお断りする。なお、以下の記述において、面接者(インタビュアー)の語りを<>で表記する。また語りについて、囲みは、鍵になる言葉を、下線は、印象に残る言葉を表している。

(1) 養護教諭のアイデンティティ様態

初期：職業選択の動機、理想と現実のギャップの語り

Aさんは本来、体育教師志望であったが、高校の担任の先生に勧められて養護教諭になった。

養護教諭って学校看護婦的なイメージがあったんですね。<ええ>だから、進路も体育の先生と思ってただけでも、一旦自分が保健室に入ると、子どもの心とかいうのかな、教育って心の教育、身体の教育というものに何か惹かれるものがあるって、あのうそれがどんどん深まってきた—(略)—看護師の資格がなかったの、大きな怪我をした子供が来た時はどうしょ、けどそれを私はできないってことをみせられないから、且ごろから自分なりにいろいろな自己研鑽ではないけども、あの救急処置に対する知識を自分で努力したと思うんですね、でも実際不安はありました。年と共に解消しましたけれども—(略)—それとね、個人の開業医のところにお手伝いに行きました。—(略)—そうそうしたら自然と自信も出て来てね、—(略)—こうしたらいいんやということを身につけてきたね。<それは何で行こうと思われたんですか>やっぱし、—(略)—この養護教諭なんも知らんって思われとうないもん。だから…<なんか意地みたいなもの>そうそう意地意地。<大事ですよ>馬鹿にされたくないもん。

Aさんは、養護教諭になって「心の教育」「身体の教育」に「何か惹かれるもの」を感じ、関心が「どんどん深まっていった」。他方、養護教諭に「学校看護婦的なイメージ」をもちながら、看護師の資格を持たないAさんには、周囲から養護教諭として認められるかどうかという不安があった。養護教諭が一人職場であることが、Aさんを不安にさせていたのかもしれない。そうした不安は、活動的な性格や負けん気の強さを持っていたAさんの、「できないってことをみせられない」「なんも知らんって思われとうない」「馬鹿にされたくない」といった「意地」によって乗り越えられていった。Aさんは、自分に繰り返し言い聞かせるように「意地意地」と語っている。この「意地」をエネルギー源としたAさんは、医学的見識を得るなどの自己研鑽を積んでいった。自己研鑽を通じて、Aさんには「自然と自信も出てきて」、「こうしたらいいんやということ」が身についた。

中期：変容の様態：印象に残る出来事の語り

小学校1年生の子の—(略)—気持ちを落ち着かせることと、外してやることと、技術と心とね、—(略)—学校でも喘息の発作が起きたんや、—(略)—〇〇ちゃん今日帰ろいうて、自転車の後ろに乗せて、—(略)—途中でね呼吸が止まりそうときね、もう、息しといてよ息しといてよいう、—(略)—何年かしてなくなってお葬式いったけどね。もうヒヤリハットそれが、あったね。—(略)—子どもがね、喘鳴とね、ドクドクがね、私の身体に伝わってくる。これは養護教諭にしかできない、一般教諭には体験できないこと—(略)—これは本当にもう死んだらあかんでという露骨な言葉が出てきたね。中学校ではね、—(略)—しぶしぶ私にね、お父さんがな家にいる時は一緒に私が寝なあかんのやと、何ちゅうこというんやという—(略)—それはあかんこ

とやお父さんというて、でもその時に頭ごなしにあかんことやいうても、病んでる子にあかんことや言うたらこれはあかんと思って、「そうかいなそんな辛い思いしとったんか」と私も涙流して、どっちも女になってしまっただけ、性（さが）を感じたねその子とね。それから民生委員さんとか、学年主任にいつて—(略)—

Aさんが初めて勤務したのは小学校であった。その経験を語るなかでAさんは、応急処置などの医学的な知識だけでなく、子どもの不安を受けとめていく精神的な関わりもまた重要であると実感していた。そして、死と隣り合わせの子どもの身体から「喘鳴」「ドクドク」が「私の身体に伝わってくる」とした。こうしてAさんは、子どもを護るという養護教諭の使命感を実感していった。そうしたAさんの願いや祈りを込めた言葉が、「死んだらあかんで」であったのであろう。養護教諭は、このように日常の執務のなかで、「ヒヤリハット」という危機場面に遭遇し、自ら判断した結果を繰り返して省察するなかで、次の判断を下すことを、積み重ねていくことが多い。Aさんは、咄嗟に一人で考え判断していく重責感の中にでも、やりがいを見出している。その体験を自負しているからこそ「技術と心」の必要性を表現し、「養護教諭にしかできない」と語った。

次に赴任した中学校でAさんは、教師という立場を超えて、子どもの気持ちに寄り添う必要性を実感している。語りからは、性にまつわる相談の際に「私も涙流して、どっちも女になってしまっただけ」と相手に共感的に寄り添う姿勢や、「病んでる子にあかんことや言うたらこれはあかん」と自らの立場を切り替えていく姿勢が読み取れる。Aさんは、「そうかいなそんな辛い思いしとったんか」と子どもに寄り添うように語りかけ、のちに子どもの代弁者として周囲に連携を求めていったのであろう。

Aさんが次に赴任したのは高校であった。

これはもう養護教諭というもんや無しにね、それこそ役者や女優やね、もう、薬物もあり、アルコールもあり、たばこもあり、男女関係もあり、暴力もあり、万引きもあり、命もあり、—(略)—私自身も経験ないことばかりをね、物凄い私の人生勉強というのかな、人間としてね、生徒に教えてもらったね。でもやっぱ子どもの心を大人が支えてやらないかんということを感じたね。

高校でAさんは、問題行動の対応に追われるなか、子どもの本音を引き出す工夫を始めた。教師であるAさんは、自分の価値観を捨て、目の前の子どもの状態に、自らを柔軟に併せ対応していった様子を「役者や女優」と表現し、ひとりの人間としてかかわりを持っていったのであろう。山本(1999)によれば、養護教諭は“何でも屋”であり、また保健室の“あいまいな”機能ゆえに

“あいまいな”子が集まりやすく、そのことが保健室で対応する事例の多様化を促進している。そのなかでAさんも、一人で何役もつとめながら、その時々で相手の立場に柔軟に寄り添い、子どもと大人の架け橋となる必要な役割をこなしていったのだろう。そんな状況をAさんは、「自分の経験のないことばかり」と表現し、「子どもの心を大人が支えてやらないかん」と語っている。そして、このように子どもに寄り添い動いた様子を「人間として」の「私の人生勉強」と意味づけしたものと考えられる。

視点が変化していった語り

保健室から教師と子どもの仲介役として、人間関係を積極的に調整すべく働きかけているうちに、悩む教師の姿に気づいていった。そして、子ども・教師・親それぞれに寄り添いながら、コーディネートしていく役割を担い、協働体制づくりを推進していった。

—(略)—講座を〇〇に受けに行っただけ、勉強してきたおかげで、親に寄り添うということも教えてもらった。だから最初はこの親にしてこの子ありやとかね、親の考え方間違るととかね、この関係でこうなったの無理ないわって最初の思いがあったけどね。あのう、講習受けてからね、親にこう寄り添って子どもを理解するということも教えてもらってね。

親へのかかわりでは、当初Aさんは、「この親にしてこの子あり」「親の考え方間違ると」「この関係でこうなったの無理ない」と親を責める指導から始めた。

しかしAさん自身の視点は、講習を自主的に受講したことから、親から離れた視点から、「親に寄り添う」という視点へと変化していた。そしてそれは、子どもを理解するという実践に生きる視点であった。Aさんは、「最初の思い」からのこのような変化を「勉強をしたおかげで」と語った。

後期：実感や手ごたえを感じる語り

最初は子どもだけしか見えなかったのがね、子ども変えようと思ったら担任も変わらなあかんし、親も変わらなあかんしということで、思いだけやったらあかんからね、やっぱし大人が変わってきたら本人も変わってきたね、それから「実感」があったからでしょうか、そうしようと思われたんでしょか>担任が私に助けSOSがかかってきて<そうか担任の先生もすごく悩んでいる>そうそう、—(略)—最初それがね、お互いに一緒に考えているうちにね、こうしよ、あーしよと、あつやっぱりそうやっただけというのが、次々と手ごたえがありかけたから、担任が変わらなあかんっていうことをそして関わり過ぎたらあかんこと、組織で動かなあかんことをね。<なるほどね>そういうことで手ごたえがあった。

Aさんは、一人で抱え込まず、担任を通じて親カウンセリングを開始した。そのきっかけとなったのは、Aさ

ん自身に、担任や親が変わることによって、子どもが変わる実感があったことだった。幾度も失敗を繰り返し模索するなかで、組織で動く重要性に気づいたものと思われる。Aさんはその過程を「お互いに一緒に考えているうちに」と語った。そこにはAさん自身の自己評価につながる自己受容する力と省察力、そして持ち前の行動力などから得られた体験に基づく「手ごたえ」が統合され、さらに行動を支えていったのであろう。またAさんは、自ら動き方を調整し、担任の成長を支援していった。

受け皿が変化していく語り

私も年と共にいえるようになったよ。私ボランティアで母子家庭の支援もしてたからね、困っているお母さんに対して何かしらうまくいえるような自分ができとったんやろね、それがピツタシあってね、それがどんどん広がってね、やっぱり親が変われば子供が変わってきたというのも「手ごたえ」があったね。必要に迫られて、—(略)—自分を変えていかないとね、受け入れられなかった。<自分を変えていかないとというのは、自分ももっとももっとという許容…>自分の「受け皿」にしないと、こんな禿げができたり、パチンコにはまったりしたもん、<なるほど>でも弱かったから、自分の子どもも思春期でね、ギャップがあるしね、でやっぱりこれ、心を大きくせなあかんし、毎日の仕事のなかにね、仲間もそうやった、仲間に恵まれたね。

今までの価値観や信念をも揺さぶられ、Aさんは、自分を受け容れていくためにも、「自分を変えていかないと」と感じ、相手の状況に合わせて必要な支援を考えたのだろう。その様子をAさんは、「それがピツタシあって」「どんどん広がって」と語っている。一方でAさんは、事象の理解はできても、自分の現状との「ギャップ」を感じ、葛藤を繰り返していった。その身体化が「禿げ」であり、行動化が「パチンコ」であったのだろう。そうせざるを得なかった状況をAさんは、「弱かったから」とし、「心を大きくせなあかん」と語った。自身のより成熟を願う気持ちを込めた表現と理解できる。

Aさんが自分に重ね合せ保護者に寄り添う語り

ここまで犠牲にしてるのだから、私が好き放題して何も成長してへんかったら、何のために働いたん。なんかそういう意地があった。意地が<ありますね>子どもに寂しい思いさせた分だけは、何か身について私がいつでもお返しできることっていうのが先生、強いよ。<ね～うん>それは言葉でゆってた娘にも、うん。お母さんあんたらに寂しい思いさせた分、今日な勉強してなみんなに返せるように勉強するから、辛抱しとってよって、よう言うとったみたいやわ。うん。(自然と涙が出てきて)自分のこらえてるところ抑えてるところ、でもこれしたいとか子どものためにごめんになって、仕事したいとかいう風なそういう先生どことなし言えないけれども、のびのびやないやん。いっ

もくいっつもね>とか、あるやん。<こっちごめんね>っていいながらね、これだけ仕事したんやとかね、それがずっと積み重ねから、お母さん困っとうやろっという、困ってる人に対する先生<あ～っ、だからお母さんに寄り添える>っという部分ができていくんや。

Aさんは、夫と実の両親の間に立ち、気を遣い過ぎていた。にもかかわらず、仕事で我が子にかまえないことに、後ろめたい思いを抱えていたことが推察される。自分の心の葛藤を「こらえて」「抑えて」と表現し、「子どものためにごめんな」と、そのことが、我が子の問題行動につながっているのではないかと自分を責め、我が子への申し訳なさを感じながら過ごしていたのであろう。Aさんはそんな心境を「のびのびやないやん。いっつも」と語った。このようにAさんのなかで、鋭い内省力によって理解を深め、新たな視点から問題を捉えなおすという変化が生じたのではなからうか。そして、その葛藤は生徒の親も一緒ではないかと考え、相手に寄り添う新たな視点を生じさせたのであろう。Aさんは、保護者に寄り添う気持ちの変化が生まれた状況を「それがずっと積み重ねから、お母さん困っとうやろ」と語った。

ここから考えると、Aさんは、それまでの養護教諭としての視点に加え、自身の親としての視点をもつことで、親に寄り添うという新たな支援のあり方を獲得したのではないか。

主体的にAさんが働きかけて、つなぐ役割

性格的に私も、こう皆と親しくものが言える人間やからね。いつの間にか女性センターに一緒に行こうとか—(略)—先生あーなんやで、こうなんやで、ということやね、常にいうてたね担任団に。<こちらから常に>保健室から<投げかけ投げかけ>担任に、—(略)—<それは保健室にじっといて待ってるのではなく、職員室で、廊下で先生たちを捕まえて>そう、そう、<子どものことをつなごうと>そう、つないだな。あのね、必要に迫られて、—(略)—保健室でじっとしてたらあかん。働きかけなあかん。—(略)—何とかしようよ。—(略)—どうにかしようよが強かったね。

Aさんは、保護者や同僚と一緒に相談センターなどへ足を運んだ。それは相手に寄り添うという自然な行動であった。また積極的なコーディネートをAさんは、「必要に迫られて」と言い、じっと待っているのではなく「つないだ」と語った。Aさんは、職務上の役割に曖昧な部分の多い養護教諭として、その曖昧さのなかで、自分で創意工夫しながら適応する力をつけていった。

このように、周りを大切に考え相手に積極的に働きかけ関係を繋いでいくAさんの姿勢は、子どもを護り、子どもと教師をつなぐ役割を果たすものであったのだろう。そして、コーディネート機能を自ら実践しているAさんは、「じっとしてたらあかん」「働きかけなあかん」と自身の動き方を表現したのであろう。

同僚のことで印象に残るようなエピソード

卒業させなあかんっていうことが根底にすごくあった—(略)—何とかさせなあかんというのが、出てきたんちゃうかなと思うな。<なるほどね>—(略)—私は、最初に学年主任と仲良くなるとうまくいくね。<なんか自分の立場を誇示しすぎず、相手のいいところを引き出すために…じゃあ担任を活かすためにどうしたらいいかを考えたときに、たぶん先生は学年主任に、動きはったんかなって思う>そうなんよ。担任と違うのに養護教諭から頭ごなしに言われたらええ思いせえへんから、学年主任に言うて、先生がみたかのようにいうて働きかけてみてっていうて—(略)—私一人では、所詮養護教諭や、先生から言うのが一番なんやっていうて、だからね、学年主任がしたってくれとったんや。<そういう意味では組織を大事に考えて先生が動かされたっていう感じ、そしてお互いを大事にするっていう立場なのか>健康診断の時なんか特にね、あーしてこーしてというんじゃないしに、学年に投げかける、考えてねっていうとスムーズに機能するような方法考えてねって、<なるほどね>ギブ&テイクやな。

養護教諭という立場から、同僚との人間関係の持ち方にも工夫が必要であった。Aさんは、学年主任に働きかけることで、生徒に対する「卒業させなあかん」「何とかさせなあかん」という思いを担任に抱かせ、担任を活かした。

このようにAさんは、組織を大切に考え、連携態勢が機能する方法を模索し行動したのだろう。Aさんの語りからは、まるで一人で全体を動かしているかのような醍醐味が伝わってきた。

Aさんは、生徒のことを一緒に考え合える態勢を整えていくために、同僚との隙間を埋めるべく、Aさんから学年主任、そして担任へ働き掛けていった。その行為には、あくまでも相手を尊重し、相手の発達を促すという“養護性”(小嶋, 1989)を秘めたAさんの姿勢が読み取れる。「なんとかさせなあかん」というAさんの語りには、周囲の環境調整をはかり、一緒になって子どもを護ろうという思いが込められているのであろう。

このようにAさんは、常に保健室から担任や保護者に働きかけ、つなぎ、調整する役割を果たしていた。そのAさんのメンタルな面を支えたのは、養護教諭の使命感からくる“子どもを護る”という信念と、関係性のなかで自分を見つめ高めようとする“省察力”，そして“自己への信頼感”であると考えられる。養護教諭にとって、どのように時代が変遷していこうとも、相手の健全な発達を促進するための共感性と技能(小嶋, 1989)を持つ“養護性”という重要な要素を育みつつアイデンティティが成熟していくものと、筆者はAさんを通して考えている。

(2) 人生における“養護教諭であること”の意味

教えてもらったりそれから一緒に考えたりね>そういうのがね、養護教諭の仲間が財産やなって<そうですね、それは代えがたいもの>年いっても、一般教諭との付き合いよりも深いやろね。一緒に勤めなくてもね、1, 2いうたら10までわかるもんね。—(略)—<同じ気持ちにね、すぐにね、寄り添えるというか>—(略)—だから先生養護教諭って年が親子ほど離れた仲間がいてもね、ええね。—(略)—もう養護教諭の研究会なんか大好きやったね。<大好きですね>何とも言えん絆やなこれは。

Aさんにとって、養護教諭の仲間は、積極的に自分の職務内容を検討できる関係であり、さらに辛いことや愚痴がいえるなど、共に悩める存在でもあった。Aさんにとって、同じ養護教諭の仲間の存在は、年の違いはあっても、相手の気持ちをすぐに察することができ、自然に寄り添える「仲間」であり、大きな支えであった。またそれは、Aさんの人生における重要な出会いでもあった。だからこそAさんは、「財産」という言葉で表現したのだろう。

苦しい時の過ごし方

おしゃれするの好きやったから奇抜なおしゃれしottaな。ガーデニングや—(略)—ハガキ書くのも好きやったからな—(略)—苦しさをごまかすために季節を出しよったな。—(略)—ずっと私一緒やわ。今やからということない。しんどい時はやっぱし土触ったりとか、おしゃれしたりとかね。

辛い時には、ガーデニングやハガキを書くことで、Aさんは自分と向き合い、時には気分転換に奇抜なおしゃれを楽しんでいた。Aさんは、自分自身を安定させる試みを色々工夫して過ごしていたのだろう。振り返り語りながらAさんは「ずっと私一緒やわ」と気づいた。Aさんのように、自己省察を繰り返してきた養護教諭にとっては、悩みや苦しみを抱え、人の辛さや痛みに共感していくためにも、セルフケアが重要となるのであろう。

養護教諭や故にね、だれっでもね、腰低うにね、色んな役者を演じること(笑い)心が大きくなったな。—(略)—これ養護教諭ならこそよ、担任してたらわからないことをね、養護教諭はいっぱいね先生、先生がいうたように色んな人から教えてもらう。何言われても何されてもね、養護教諭は女という人権的なこともあったな。—(略)—そして向こうで何言われても、向こうが怒ってもかまへんって思ってしまうんや。そんな養護教諭でないといかん。不登校とか病める子にね、頑張りとか学校いかなあかんてという事と同じことで、だから私は現実をそのまま見てな、それでいいやん。

Aさんは、養護教諭特有のアイデンティティを、自らのあり方を模索し悩み続けながら見出していった。「何言われても何されても」「だれっでもね、腰低うにね、色んな役者を演じる」との語りからは、寛容さ、柔軟性、

現実検討力の強さを持ったアイデンティティ様態が推測できた。その様態をAさんは、「心が大きくなった」と表現している。まさに目の前の状況に合わせて、自ら多角的な視点を持ち検討できる心の余裕と安定感が感じられる。また、「向こうで何言われても、向こうが怒ってもかまへん」との語りは、Aさんが、現実をそのまま受け入れることのできる人間的な安定感と、状況に応じて対応できる柔軟性を併せ持っていることを示唆している。その状況をAさんは、「現実をそのまま見てな、それでいいやん」と語った。このことはAさん自身が、養護教諭の経験を通して、些細なことでは揺るがない強靱な人格の持ち主となったことの裏づけである。

(3) ライフストーリー・インタビューを通して

色々と39年間のことをね、吐き出させてくれるは嬉しかったです。—(略)—私のあんた39年間をね、総まとめにしてね、お話しできたというのが、先生のおかげです。<いえいえ、とっても大事な機会を与えていただきました>凝縮してね、39日みたいに凝縮してね、お話しできました。楽しかったなあ。養護教諭ならこそや、これは。

「私のあんた39年間をね、総まとめにしてね、お話しできた—(略)—39日みたいに凝縮してね」と語るAさんは、ライフストーリー・インタビューを通して、Aさん自身の経験の中身と、その後の人生との関連性を、人生を振り返り物語ることによって意味づけた。そして、数々の経験をくぐり抜け、今自らの人生を振り返った時に、養護教諭なりの人生を送ってきた満足感から、新しいAさんを作りあげていく作業に、意欲的に向かおうとしているのであろう。そしてそれらは、同じ職をもち、後継者でもあるインタビュアーとの関係性のなかで共同生成され紡ぎだされたのだろう。インタビューを振り返りながらAさんは、締め括りの語りで「楽しかったなあ」「養護教諭ならこそや、これは」と表現している。このようにインタビュー自体が、塚田(2008)がいうように、研究協力者にとって少なからずエンパワーメントの場となりうることを実感した。そして、人生において養護教諭という経験が、それぞれの形で自己肯定感を育み、自らの人生に意味を与える機会になったのではないかと考えられる。

しかし今回のインタビューの瑕疵もある。同職種であり後輩である筆者ゆえに、研究協力者であるAさんの心遣いもありうる。筆者が期待しているモデル・ストーリーをあえて語ることもあるかもしれない(塚田, 2008)。そう考えると、ネガティブな語りを引き出せなかった可能性もぬぐえない。同職種でありよく知っている協力者との関係であるからこそ、表現されなかったことがあることを忘れてはいけない。

4. まとめと提案

今回退職養護教諭Aさんのライフストーリー研究を通して筆者は、以下のことに気づかされた。Aさんは、人との関係性のなかで“養護性”を育みながら、独自のアイデンティティを成熟させていったのではないか。ここでいう“養護性”とは、小嶋(1989)によれば、“相手の健全な発達を促進するための共感性と技能”のことである。また、Aさんは、多様な葛藤に直面し、かつ多様な役割を担いながら生きることで、人生の意味合いを深く濃くしながら、退職後の人生を生きる原動力としているのであろう。そして養護教諭であり一人の人間でもあるAさんを支えたのは、家族、養護教諭仲間、同僚や生徒といった人との絆であった。

以上のように、本稿で筆者は、退職養護教諭個人の語りから、時代の変遷とともに多様な役割を担い、個と関係性の発達のなかで成熟していく養護教諭のアイデンティティ様態を考察した。養成課程の違いなど個々の背景が異なることもあり、養護教諭の経験や物事の捉え方は、人によって異なる。したがって本事例のみで養護教諭のアイデンティティ変容過程は一般化できない。しかし、他の数名の研究協力者(岸本, 2013)との共通性として見出されたこともある。

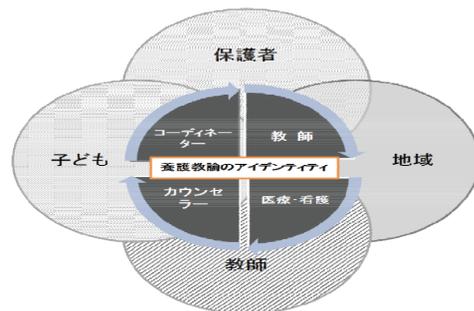


Figure1 養護教諭のアイデンティティ様態

Figure1に示すように養護教諭は、相手(子どもや周囲の大人)にあわせて、かかわりを持ちながら、相手の成長を促す役割を担っていた。養護教諭のアイデンティティ様態には、対象の状態に柔軟に寄り添う力と、全体を俯瞰しその時の状態に合わせ、相手の成長を支援する役割(医療・看護、教師、カウンセラー、コーディネーター)を使い分けていくしなやかさ、さらに、周囲の環境を調整しつないでいく力を併せ持つことが重要であると示唆された。対象に即して柔軟に自分の役割を見極めこなしていく力が、“養護性”であると筆者は考えている。

今後教育現場において養護教諭のあり方を考えるとき、研究で見出されたこれらのことが、児童生徒や彼らを支える周囲の環境への様々な支援を考える際の一助となれ

ばと考えている。今後さらに、養護教諭のアイデンティティについて見つめていくためには、当事者側の養護教諭像だけでなく、子ども・同僚・保護者・社会といった多角的な視点を加えることにより、養護教諭像が明らかになるのではないかと考えている。

最後に、筆者は、研究の目的を改めて考える段階からすでに、養護教諭の歴史の重みと先達への畏敬の念を、心と身体全体で感じずにはいられなかった。そして養護教諭として自らの生き方を見つめ直し、これからの人生を考える貴重な機会が得られた。桜井（2005）が“ライフストーリー・インタビュー実践の真骨頂”とし、“インタビューと二重写しの人生を経験する”と述べる如く、筆者自らの生活史経験を振り返る機会となった。筆者は、養護教諭であることに誇りを持つことができ、自ら主体的な生き方を掴む勇気が湧き起こってきていることに気づかされた。

引用文献

- 小嶋秀夫（1989）. 養護性の発達とその意味 小嶋秀夫（編）乳幼児の社会世界 有斐閣選書
- 岡本祐子（2008）. 女性のサイクルとこころの危機 こころの科学 No.141 女性のこころと悩み 日本評論社 18-24
- 岸本久美子（2013）. 養護教諭のアイデンティティ変容過程に関する研究 兵庫教育大学大学院学位論文
- 桜井 厚・小林多寿子編著（2005）. ライフストーリー・インタビュー セリカ書房.
- 竹下千尋（2003）. 退職教員の現役引退期におけるアイデンティティに関する臨床心理学的研究 兵庫教育大学大学院学位論文（未公刊）
- 竹家一美（2008）. ある不妊女性のライフストーリーとその解釈－「不妊」という十字架を背負って－京都大学大学院教育学研究科紀要, 54, 152-165.
- 田澤安弘（2005）. 養護教諭のアイデンティティと臨床教育学 北海道教育大学紀要, 55, 233-247
- 塚田 守（2008）. ライフストーリー・インタビューの可能性 椋山女学園大学研究論集 第39号 1-12
- やまだようこ（2000）. 12. 成人後期：世代を育み伝える [小嶋秀夫・やまだようこ編著] 生涯発達心理学 東京：放送大学教育振興会 156-170
- 山本和郎（1999）. 学校保健と養護教諭 教育と医学, 47, 700-705

（2013. 8. 30受稿, 2013. 11. 18受理）